

「雨の中の猫」論

日 下 洋 右

On “Cat in the Rain”

Yosuke KUSAKA

「雨の中の猫」(“Cat in the Rain”) ¹ は、1923年2月にイタリアの保養地ラパルロのホテル・スプレンドイーデで、ヘミングウェイがハドリーと過ごした雨の降る一日の体験から生まれたものである。² 「二人の体験から生まれた」作品が暗示しているように、この物語のモデルについては興味深い問題があり、その点について言及された資料を検討すれば、新しい事実の発見が期待できるかもしれない。モデルの問題を重視する主な理由は、この物語が曖昧で難解なため、モデルが突きとめられるならば、若いアメリカ夫婦の間にどのような事態が生じているのか見当が付き、それがこの謎のような作品を解明する重要な鍵となる可能性があるからだ。奇妙なことだが、モデルの手がかりを与えたのは作者自身である。

ヘミングウェイは1925年12月24日に、宿泊先のオーストリアのシュルンスからF・スコット・フィッツジェラルドに宛てた手紙の中で、「雨の中の猫」のモデルに言及している。「雨の中の猫」のヒロインは、フィッツジェラルド夫妻を含め、大方の読者の予想とは異なって、ハドリーであるとする見方が否定されている。若夫婦のモデルは、ヘミングウェイがジェノアで出会ったハーヴァード大学出身の青年とその妻であり、ホテルの管理人は「季節はずれ」の舞台であるイタリアの保養地コルティナ・ダンペッツォの宿屋の主人である、とヘミングウェイは語っている。

〔“Cat in the Rain”〕 wasn’t about Hadley. I know that you and Zelda always thought it was. When I wrote that we were at Rapallo but Hadley was 4 months pregnant with Bumby. The Inn Keeper was the one at Cortina D’Ampezzo and the man and the girl were a Harvard kid and his wife that I’d met at Genova. Hadley never made a speech in her life about wanting a baby because she had been told various things by her doctor and I’d—no use going into all that.³

作者の主張の中で注目に値する点は、「雨の中の猫」の女主人公のモデルがハドリーでない理由を明確に述べていることである。ラパルロ滞在当時、彼女が妊娠4か月であった点と、子供を欲しがることは一度としてなかった点をヘミングウェイは強調しているからである。しかし、フィッツジェラルド宛ての書簡には事実誤認が認められ、ヘミングウェイの主張に信憑性の疑われる点がある。

ヘミングウェイ夫妻は1923年2月11日にラパルロに到着し、エズラ・パウンドの滞在していたホテルに部屋をとったが、1週間後パウンド夫妻がローマへでかけた後、二人はラパルロの最高級ホテル、スプレンドイーデの2階に宿泊した。⁴ ヘミングウェイの説明によれば、この時ハドリーは妊娠4か月であったという。しかし、長男ジョンは、その年の10月10日に生まれているので、カール・P・エビィの指摘を待つまでもなく、ヘミングウェイの説明では妊娠期間の計算が全く合わない。⁵ 実際、ジェフリー・マイヤーズは、ハドリーが妊娠した時期を同年の1月であったとみているので、妊娠4か月説はヘミングウェイ自身の作り話であろう。しかも、同じ年の2月にはハドリーが妊娠

したことを初めて夫に告げており、彼自身もそのことを認めている。⁶ 以上のことから、ヘミングウェイはこの書簡の中で、ハドリー説を覆そうと試みたが、かえってハドリーのモデル説を強化してしまう結果になったといつてよい。

ヘミングウェイの手紙には、この物語がハドリーのモデル説と深く関わっていて、見逃すことのできない点がもう一箇所ある。マイヤーズもフィッツジェラルドに宛てたヘミングウェイの手紙に強い関心を示しているが、その中でも特に“Hadley never made a speech. . . and I'd—no use going into all that.”に注目している。このような言い方から、二通りの解釈が引き出され、そのどちらかが事実であった公算が大である、とマイヤーズは主張している。つまり、ハドリーは体質的に子供を持つことができないと医者に宣告されていたが、予防策をとっていなかったため思いがけなく妊娠したか、あるいは妊娠すれば母体のことを考えて中絶しなければならないと忠告されて予防策をとっていたが、たまたま妊娠して出産することに決めたかのどちらかである。このいずれかの事実が「雨の中の猫」に反映されており、ヘミングウェイの弁明にもかかわらず、この作品は明らかにハドリーに関する物語である、とマイヤーズは確信している。⁷

ヘミングウェイ自身この妊娠を望んでいなかったという指摘も、ハドリーのヒロイン説を補強する材料として見逃すことができない。というのも、この事実は「雨の中の猫」で描かれる若夫婦の結婚生活に波風が立っていることを裏づける証拠を提供することになるからである。1923年の2月18日に1か月前フランス領となったばかりのルールへ、ヘミングウェイは二人だけで旅行しようとジョン・ボーン (John Bone) に提案しているが、このハドリーを抜きにした旅行計画こそ、彼女が彼の意に反して妊娠したことに対する一種の罰であったと同時に、彼が彼女の妊娠を望んでいなかった何よりの証左である、とマイケル・レノルズは主張している。⁸ ハドリーは出産前ですら、夫をさまざまな点で束縛し、彼の自由を制限する性質の女性である、と彼は彼女をみていたので、子供ができれば「涯しない雪」(1925)のジョージのように、いっそう制約されることが多くなり、気楽な生活ができなくなることを懸念していたのである。⁹

このように、伝記などの二次資料が利用できるようになると、曖昧で難解な「雨の中の猫」も解決の糸口が得られそうである。言い換えれば、このような資料がつぎつぎと世にでる以前は、この短篇がそれほど重要視されず、評価も低かった裏には、これをどう読み解くべきかとまどった研究者が多かったのではないかと推測される。そのためか、50年代から70年代にかけてこの作品を考察したものは驚くほど少なく、しかもたとえ扱われていたとしても、断片的で荒削りなものがほとんどであるのも首肯できよう。

ヘミングウェイの高名な研究者の一人カーロス・ベイカーは、「雨の中の猫」に登場する若夫婦の結婚生活が正常な状態にあるという前提から出発している。“If ‘Hills Like White Elephants’ throws light into the nether regions of selfish human abnormality. . . one can balance it with such insights into the normal married state as ‘Cat in the Rain.’”¹⁰ このように、ベイカーは若夫婦の間に精神的な溝が横たわっていて、妻が疎外感を味わっている状態にあるとみようとはしない。ベイカーは若妻があれば子猫の救出に拘泥しているにもかかわらず、心の不安定な妻あるいはその境遇と子猫を同一視しようとはしない。したがって、ベイカーにとって、子猫は妻が心の中に描く「心安まる豊かな家庭生活」とみなされるのも、当然の帰結というべきであろう。“When she goes to get it, the animal (which somehow stands in her mind for comfortable bourgeois domesticity) has disappeared.”¹¹

それ以上に重要な点は、ベイカーがこの作品をハッピーエンドで終っている物語と解釈していることである。ベイカーはホテルの主人から妻に贈られた三毛猫を彼女の救いだせなかった猫と同一視しているか、少なくとも別個の猫である可能性を排除している。とすれば、最後に妻は欲しい猫

を手に入れて、自己の希望がかなえられると解釈されるので、物語が幸福な結末で終るという解釈が生まれるのである。“It [The cat] is finally sent up to her by the kindly old inn keeper, whose sympathetic deference is greater than that of the young husband.”¹² この結論では、二度出現する猫の問題の他に、若妻に対するホテルの管理人と夫の態度が簡単に比較されている点にも注目される。ペイカーには気づかれていないが、二人の性格や姿勢の差異には、この物語の解釈に影響を与える深い問題が潜んでいるからである。ペイカーの「雨の中の猫」に対する批評は、批評そのものとしては大まかで分析的でないうえに、評価も明確でないが、この物語の抱える問題点がほとんどすべて浮き彫りにされていて点で軽視できないであろう。具体的にいえば、冒頭と結末にでてくる猫は同一か別個か、猫は何を意味するのか、ホテルの主人と夫はどのような人物か、アメリカ人夫婦の結婚生活は正常なのか異常なのかなどの問題が、この物語に関するペイカーの考察から提起されよう。

「雨の中の猫」に関する60年代及び70年代の批評は、ペイカーの解釈から脱却し切れないものと、ペイカーの考察と距離を置こうとしているものが認められるが、影響力のある業績はきわめて少ない。¹³ シェルダン・ノーマン・グレプスタインは、ヘミングウェイの作品の技巧を考察して、対話が登場人物の性格描写の様式と物語の内容の大部分を作り上げていると主張し、それを裏づける具体的な一例として、「雨の中の猫」を取り上げている。ホテルに宿泊している若いアメリカ人夫婦の間には異常性が見当たらないとする彼の見解は、二人の結婚生活が正常な状態にあるとするペイカーの見方と同一線上にあるといえよう。“For example, in ‘Cat in the Rain’ we never do discover what is wrong between the two young Americans in their hotel. . . .”¹⁴

しかし、この物語には不調和な形がいくつか認められるが、その中でもグレプスタインが強調しているものは、妻を幼稚な人物であるとみなしていることである。彼は外にいる猫を手に入れたという妻の夫に対する訴えを気まぐれな要求と決めつけている。それどころか、彼は猫や髪型の変更やその他のものごとを妻が切望する行為を、甘やかされた子供がすねてひとりよがりになっている状態を示していると断じている。彼は不調和な形のもう一つの例として、妻の不機嫌な態度に夫が読書に浸って無関心な態度をとっている点をあげているが、夫の態度についてはそれ以上の追求がなされていない。というのも、妻は子供じみて異常であり、夫は正常なのだという先入観にグレプスタインが囚われているからである。したがって、妻がなぜホテルの主人に好意をよせるのかを検討する必要はないので、夫とホテルの主人との比較は、彼の念頭には浮かばなかったであろう。若妻が子供のような人物であるとすれば、二度登場する猫はどのような意味を担っているのか、またそれらの猫は同一の存在なのかどうかに関しても、考察する必要がなくなるであろう。この物語でもヘミングウェイ独特の省略技法が用いられており、重要な事実が表面下に隠されているので、グレプスタインのように表面下の事実を追求せずに、表面上の現象のみを捉えて論じるのでは、物語の本質を全く歪めるか見失ってしまうことになるであろう。

アメリカ人夫婦が宿泊中のホテルに面している海も、シュロの樹と戦争記念碑のたっている公園も、広場もすべて雨に包まれ、人影がみられないように、作品が雨に支配され、わびしくて惨めな雰囲気醸成している点に、ジョゼフ・デファルコは注目しようとしている。このような雨模様と波が一直線となって浜辺に打ち寄せては返す海のイメージによって引き起こされる憂鬱な調子は、これから起ころうとしている表面上の出来事と若妻の心理的葛藤を暗示している、とデファルコは主張して、他の批評家が試みていなかった雨や海と登場人物の心理や行動との関係を究明しようとしている。“The doleful tone invoked by the rain and sea imagery fore-shadows the coming action on the surface level and suggests the inner conflict of the chief character.”¹⁵

ペイカーやその他の研究者たちが言及しているホテルの主人の人物像についてはデファルコも着

目しているが、彼の手法は夫とホテルの主人を単純に比較する方法を用いるのではなく、はるかに分析的である。若妻が“I liked”と繰り返して好意をよせる情け深くて威厳があり、包容力のあるホテルの主人は、彼女にとって威厳と大黒柱の役を果たす理想的な父親像の投影である、と彼は主張する。この投影は理想的な父親像という若妻の概念に相応しいように思われる人物と自己とを結びつけざるをえない、彼女の心理的要求から生じたものである。猫を捜しに妻が雨の降る戸外へでた時、ホテルの部屋係が彼女に“Ha perduto qualche cosa, Signora?” (“Have you lost something, Madame?”) (130)と尋ねる言葉に彼は注目する。妻の失ったものは、夫と深く理解しあうことであり、“I want”と繰り返し夫に訴えかける彼女の心の奥に潜められた欲求であることを、彼は明らかにしている。妻の夫に対する要求が彼女の心の底にある欲求の表出であることを夫は理解できず、表面的で消極的な反応しか妻に示すことができない結果、妻は孤独に陥り、雨の中の猫と惨めな境遇にある自己を同一視することになる、と彼はみている。しかし、デファルコにとって、猫は妻の文字通りの表面的な欲求の対象にすぎないので、結末で部屋係が持参した三毛猫は、妻が失った心の奥底に存在する欲求の対象とはなりえない。そのため、彼女の真意を理解できずにこの猫をよこしたことによって、理想的な父親像として彼女が好意と信頼をよせたホテルの主人も、夫と同様精神的な支柱とはなりえないことを妻は認識して、アイロニーを帯びた幻滅に陥って物語が終る、とデファルコは結論づけている。

デファルコの見方は、既に取り上げた研究者たちの考察よりもはるかにまとまって深みがあるが、それでもいくつか問題点を抱えている。例えば、ホテルの主人の分析は評価できるが、それ以上にこの物語の解釈を左右する夫婦関係が相互理解を欠いた状態にあるとすれば、その状況と原因の究明が不可欠であるにもかかわらず、ホテルの主人の検討に比して不十分で説得力に欠ける。ここでも二度出現する猫が同一のものかどうかの疑問が生じるが、デファルコがこの点に疑問を抱いた形跡は認められない。結末のアイロニカルな印象は、部屋係によって持ちこまれた猫が妻の表面的な欲求の対象であり、彼女の心からの欲求の対象でないことから生ずるギャップと、同時に妻が自分を心から理解してくれるものと期待し、好意をよせたホテルの主人の理想的な父親像と結局彼女の心の叫びがわからない彼の現実の姿から生じたギャップによって引き起こされる、とデファルコは主張している。しかし、結末のアイロニックな解釈は、夫から疎外されて孤独な状態にある妻が自己と同一化する冒頭の子猫と、彼女が子猫を求める意味も彼女の欲求をも理解できないホテルの主人が贈る三毛猫とが、同じ猫でなかったことによって成り立つ点にも注目すべきである。

1980年代になると、「雨の中の猫」に関する研究が60、70年代よりも理解が一段と深まり、新しい切り口がみられるものと期待されるが、実体は必ずしもそうではない。例えば、伝記的な資料を駆使して、新しい視点からすぐれたヘミングウェイ研究を世にだしたケネス・リンの分析では、それまでの研究成果が生かされた形跡も、斬新な分析の証拠も認められず、むしろ後退しているといえるかもしれない。若妻は結婚生活に女性らしさを満足させる点が全くないことに落胆し、不幸だと感じているが、リンは女性らしさの喪失がとりわけ彼女の短髪にした髪型にあるとみなしている。“The woman is unhappy because nothing in her life is sufficiently feminine to suit her. . . The unhappiness she expresses about her hair is particularly striking.”¹⁶ しかし、リンは彼女の髪型以外の欲求をすべて引用しているにもかかわらず、それらの欲求を彼女が夫に主張する理由にも意味にも何一つ言及していない。物語の結末で妻に持ちこまれた三毛猫を、彼女の人生が全くおもしろみに欠けていることに対する「残念賞」とリンがみなしている点からみても、二人の結婚生活、それどころか物語そのものが緊張した精神状況に支配されていることをリンは全く感じ取っていない。事実、リンは物語の舞台全体が雨に包まれて人気がない雰囲気の意味にも、夫の行動や生き方にもホテルの主人の人物像にも、雨の中の猫と三毛猫のもつ意味にも全く関心を示していない。し

たがって、リンの考察は極めて断片的で理解も分析も不十分なままに終わっている。

以上のように、「雨の中の猫」に関するこれまでの研究成果を概観すると、この作品が曖昧で難解なためであろうが、ここで取り上げた批評はすべて断片的な考察で終わっていることがわかる。したがって、本論の課題は、伝記的な資料から得られた成果を利用し、他の批評家の研究成果を踏まえて、この謎のような短篇を全体的に考察し、説明しようとするものである。

「雨の中の猫」では、物語の舞台も登場人物の心理や行動も、雨天によって支配されている。晴天なら戦争記念碑を見物する人びとや画架を携えた絵かきたちを引きつけるホテルの前の公園も、雨天ともなれば訪れる人もいない淋しい場所と化す。波頭の白く砕けた波が横一線となって岸に打ち寄せては返す人気のない浜辺の風景も、雨の日の陰鬱な雰囲気をも助長している。ホテルの二階に宿泊している若いアメリカ人夫婦が、このような雨の日の人影が絶えた自然環境に取り囲まれ、加えて宿泊客の中に知り合いが誰もいないと語られると、二人は周りの世界と隔絶されて孤立状態にあることが明らかとなる。とりわけ、この短篇の雰囲気と舞台を支配している雨天は、結婚後の妻の孤独と欲求不満の惨めな精神状況を映し出している。夫から遊離した妻の不安な心境は、二人の夫婦生活の不調和な関係に起因している。したがって、二人の結婚生活の不一致はどこから生じているのか、この作品の謎を解くために取り組まなければならない中心的な問題となる。

雨は『武器よさらば』(1929)で死を予示したようにマイナスのイメージを内包する一方、生命を育む「豊穣」(“fertility”)というプラスのイメージをも持ち合わせている。この点で、雨天と晴天、豊穣と死という概念から、「雨の中の猫」の独創的な分析を試みているジョン・V・ハゴピアン(John V. Hagoopian)の論文は注目値する。ハゴピアン(John V. Hagoopian)の論文は1962年に発表されたものであるが、既に概観した同時代の他の論文よりも示唆に富む独創的な内容を備えている。ハゴピアン(John V. Hagoopian)の考察は、ベーカー(William S. Baker)が分析の基本原理とした象徴主義を極端に推し進めたものである。

晴天の日には公園に画家がいつもやってきて、生命の誕生を象徴する創作活動を行うが、雨天では創作活動が妨げられる。というのも、雨の日には画家は公園を訪れず、生命の死を象徴する雨に濡れて光る戦争記念碑がたっているからである。この作品が雨によって支配されていることから、若夫婦の結婚生活には生命の誕生を妨げる要因が作用していることを、ハゴピアン(John V. Hagoopian)は示唆しているのである。事実、ハゴピアン(John V. Hagoopian)は二人の関係が危機的状況にあるという前提から出発している。というのも、豊穣をシンボライズしている公園が死を意味する戦争記念碑によって支配されていることは、妻の妊娠が不可能な状況にあることを暗示しているからである。ハゴピアン(John V. Hagoopian)は生命の誕生が妨げられると思われる点を、雨合羽のイメージによって例証しようとしている。雨の降る最中に広場を横切ってカフェへ向かっている男を雨から保護している雨合羽は、生命を生みだす雨から体を護ろうとしている意味で、目撃する彼女にとって無意識的に妊娠と対立する避妊のシンボルとされるからである。この結果、ハゴピアン(John V. Hagoopian)の主張を敷衍すれば、若夫婦の結婚生活は避妊の繰り返しによって子供のできない状態にあるが、子供が欲しい妻と欲しくない夫との間には軋みが生じ、危機に直面していることになる。

As she looks out into the wet empty square, she sees a man in a rubber cape crossing to the cape in the rain. The critical reader seeking significance for every detail... is encouraged again to speculate on possible meanings. The rubber cape is protection from rain, and rain is a fundamental necessity for fertility, and fertility is precisely what is lacking in the American wife's marriage.¹⁷

ハゴピアン(John V. Hagoopian)は極めて示唆に富む興味深い指摘をしているにもかかわらず、割り当てられた紙面の都

合からであろうか、自説をさらに深めようとする努力を放棄している。

ハゴピアンのユニークで有益な主張をさらに展開したものが、オドヴァー・ホームズランドの論文である。ホームズランドはハゴピアンの象徴論を敷衍し、補強しているからだ。

Hagopian makes an elaborate network of symbolic explanations to derive a coherent meaning from the various elements. The rubber cape, by some subconscious projection of the wife's preoccupations, becomes a symbol of contraception. She is allegedly childless and therefore wants a kitty to cuddle as compensation. In effect, such a reading combines the fertility associated with the rain, and the "public garden," "the big palms" and "green benches." As signaled by her awareness of the man with the rubber cape, the wife's marriage to George is a contraceptive against fertility. One might argue that the possibility of such a connection is strengthened by the fact that the hotel proprietor brings her an umbrella for protection against the rain.¹⁸

例えば、ハゴピアンは雨と豊穡との象徴的關係にも注目しているが、ホームズランドはこの連関を「公園」、「大きなシュロの樹」、そして「緑色のベンチ」などの植物や植物を連想させる色彩と結びつけることによって補強している。しかし、アメリカ人若夫婦の豊穡と結びつけられるはずの結婚生活は、生命の誕生が期待できない不毛の性格をいっそう強める。というのは、ハゴピアンの主張する雨合羽が象徴する避妊のイメージは、子猫を助けようと外にでる妻を雨に濡れないように保護するため、ホテルの主人が部屋係に持たせた雨傘で彼女を覆うという動作によって強化される、とホームズランドはつけ加えるからである。このように、妻は子供が欲しいにもかかわらず、度重なる避妊によって子供を持つことができないため、その代償として子猫を抱こうとすることに固執するエピソードが、前景として描かれているのである。

しかし、ハゴピアンとホームズランドが指摘しているように、子供を持つことを不可能にしている原因は、避妊にしかないのであろうか。確かに、避妊は妊娠を回避し、生命の創造を阻止する機能を有しているが、ハゴピアンの主張する公園の戦争記念碑が象徴している死というイメージと結びつく理由としては、薄弱すぎるように思われる。ハゴピアンの象徴論から、カール・P・エビィも引き出しているように、避妊説の他にもう一つの選択肢が見つけられる。それは、人工中絶の可能性である。“Yet the fact that the American girl in the story never makes any such speech either—at least not *directly*—and that Hadley had, in fact, first told Ernest of her own pregnancy in February 1923, suggests, as John Hagopian argued decades ago, that the cat in the story functions as a replacement for a child that the young woman—clearly based Hadley—either cannot have, or is under some pressure to abort.”¹⁹ 中絶ならば生命を人工的に断つので、戦争記念碑がイメージする死と直接結びつくであろう。

マイヤーズも例のヘミングウェイの書簡のうち、“Hadley never made a speech in her life about wanting a baby because she had been told various things by her doctor. . . .”に注目し、この部分からハドリーが体質の問題を抱えていたため、妊娠を禁じられていた形跡があることを指摘し、二通りの解釈を具体的に引き出している。その一つの解釈は、ハドリーの体調を考えて避妊していたが、思いがけず妊娠してしまったため、出産することに決めたというものである。しかし、1923年2月にラパルロでヘミングウェイはハドリーから妊娠したことを告げられたとき、出産を極端に嫌ったことから予想されるように、出産を決意する前に二人の間で中絶のことが話し合われたが、二人の意見が一致しなかった期間があったという選択肢も十分考えられる。したがって、この作品

は雨合羽や雨傘に象徴されているように、若夫婦が避妊をしていたがそれに失敗して妊娠したため、中絶すべきかどうか二人の態度が一致せずに波風のたっている時期の有様を取り出して描いたものとみるべきである。夫は中絶を当然視しているので、彼には妻のように動揺した雰囲気はみられず、きわめて冷めたくそっけない態度しか認められない。妻が雨の中から救出できなかった子猫が欲しいと執拗に訴えても、夫が関心を示さない理由もその辺にあるとみてよい。一方、中絶に承服できない妻は、子供をおろす方針に別の方向からいろいろな形で抵抗を試みる。

妻は短く刈り上げた髪型にあきあきしたので、髪を長くのばして、膝の上にのせておく子猫が欲しいと主張する。“I want to pull my hair back tight and smooth and make a big knot at the back that I can feel,” she said. “I want to have a kitty to sit my lap. . . .” (131) 髪を長くのばし、髪を頭の後で束ねて結えるようにしたという欲求は、当時の若い女性の典型的なヘアスタイルである短髪をやめて、母親のような髪型に変えようとすることを意味している。とすれば、この場面は子供を出産して母親となり、子供を膝の上にのせてあやしたいという願望が彼女の意識の中で働いていることを示している。したがって、髪型の変更は単に「女性らしさ」を求めているのではなく、子供を出産して母親になりたいとする彼女の切実な願望の表出であり、夫の中絶肯定論を否定しようとする意思表示であるとみるべきだ。

妻の欲求は単に髪型にとどまらず、他の方面へも向けられる。

And I want to eat at a table with my own silver and I want candles. And I want it to be spring and I want to brush my hair out in front of a mirror and I want a kitty and I want some new clothes. (130)

銀器が並び、ローソクのともるダイニングテーブルは、親子が食卓についている楽しい家族の食事風景を連想させる。妻は自分の腕の中に抱きたいと願う赤ん坊の補償とされる子猫を欲しがると他に、春の季節の到来を待ち望み、長い髪を鏡の前で解かしたいと願ったり、新しい衣服を求めたりするのは、子供をつくらないようにしてきたこれまでの生活を捨て去り、子供を出産して母親となって新しい家庭生活を築きたいとする妻の願いを示している。このように、妻は母親と子供の存在する家庭の価値観を夫に示して、中絶の圧力に抵抗しようとする。

妻から次々と欲求を突きつけられた夫が“*Oh, shut up and get something to read.*” (131) というように、彼の反応は気分を害し、彼女の欲求不満を受けとめようとししないことである。なおも子猫が欲しいと繰り返す妻に対する夫の最後の解決策は、聞く耳をもたず全く無関心になることである。しかし、妻がホテルの主人に好感を抱くのは、彼女の欲求不満のはけ口を夫からホテルの主人に向けたからではない。“*I liked*” が示すように、妻は夫としの義務を果たそうとししない彼女の主人と対照的なホテルの主人に好感を抱くにすぎない。

The wife liked him. She liked the deadly serious way he received any complaints. She liked his dignity. She liked the way he wanted to serve her. She liked the way he felt about being a hotel-keeper. She liked his old, heavy face and big hands. (130)

妻は主人が管理人としての任務をまじめに遂行している点に好意と信頼をよせているのである。不満にも耳を傾ける態度、威厳のある態度、自己の身分をわきまえた態度が好きであると彼女が語るとき、それは職務をまじめに果たすホテルの管理人と二人の重要な問題に真剣に対応しようとしな

hands” は、ホテルの主人の好ましい性質がその顔と手に集約されていることを表しているのであり、理想的な父親像の象徴ではない。

妻が猫を発見できずに部屋へ戻る途中、帳場の前を通りかかった時、ホテルの主人からお辞儀をされて、妻は心の琴線を刺激される。“Something felt very small and tight inside the girl. The padrone made her feel very small and at the same time really important. She had a momentary feeling of being of supreme importance.” (130)

この場面はホテルの主人が部屋係を差し向けて妻に雨傘を差し掛けたシーンの後の描写であるので、主人が彼女の期待通り管理人としての義務を果たし、客を大切にもてなす態度と行為に彼女が恐縮したのと同時に、それを素直に受け入れて自分が偉い人物になったとも感じたことを示している。この引用は彼女が妊娠したことを示す唯一の証拠とされることがある。しかし、ウォーレン・ベネットが反論しているように、ホテルの管理人のような他人が妊娠したことを妊婦に感じさせるというのは全く不合理であり、妊娠した場合には胎児が子宮の内部で小さく感じられるのではなく、大きくなっていると感じられるものであるので、この描写を妊娠の根拠とするのは矛盾している。²⁰ 妊娠説の解釈に立つと、その前提として妊娠を裏づける証拠が必要となるため、無理な解釈が生まれることになる。しかし、ハドリーのモデル説に立脚し事実に基づけば、当時彼女は妊娠1か月から2か月の時期にあったので、胎児が子宮の中で動く兆候は全くないため、妊娠している場面を描く必要はない。

彼女が聞き届けてくれるものとホテルの主人に期待をよせたのは、例えばデファルコが主張するように、彼女の心の奥底にある欲求ではない。ホテルの主人にはせいぜい何日か宿泊する夫婦の結婚生活の内部事情がわかるはずもなければ、ましてや彼女の夫に対する不満や欲求も理解できるわけがないからである。したがって、ホテルの主人に心の内が理解されなかったために、妻が幻滅を抱くことはありえない。彼女がホテルの主人に望んだことは、子猫をみつけだしてくれるかもしれないという期待感である。それ以上の望みがあつたとすれば、子猫にこだわる理由から、せいぜいその背後にある彼女の欲求不満を察してもらえればよいという程度のものである。

しかし、ベネットが指摘するように、妻が発見できなかった例の子猫がホテルの主人によっても部屋係によっても探索された形跡はない。二人には妻と一緒に雨の降る表へでて子猫を捜す気配が認められないので、二人がその後で子猫を捜そうと外へでたとは考えにくい。えに、たとえ捜しにでたとしても、わずかな時間のうちに猫が姿を消していることを考えれば、二人がこの猫を見つけることは不可能と思われるからだ。²¹ したがって、冒頭で言及されている猫と結末で姿をみせる猫が別ものであることは明らかである。猫が同一でないとすれば、「雨の中の猫」はベーカーなどの見方のように幸福な結末で終る物語ではなく、妻が自己の精神状況を投影した孤独で惨めな子猫に対する欲求と、部屋の中でぬくぬくと飼われている大きな三毛猫が持参された現実との落差から、アイロニーを帯びた不幸な結末で終る物語であるとみるべきだ。この見解はアイロニーの手法がヘミングウェイの最も好む技法の一つであることに加えて、「雨の中の猫」が収録されている『われらの時代に』の登場人物たちが、何らかの苦渋に満ちた体験を味わって幸福な結末を迎えていない点も、この短篇のアイロニックで不幸な結末を補強する根拠となるであろう。

注

- 1 本文の（ ）内の引用ページ数は、Ernest Hemingway, *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway* (New York: Charles Scribner's Sons, 1987) による。

- 2 Carlos Baker, *Ernest Hemingway : A Life Story* (New York : Charles Scribner's Sons, 1969) 133.
- 3 Carlos Baker, *Ernest Hemingway : Selected Letters 1917-1961* (New York : Macmillan Publishing Company, 1981) 180.
- 4 Peter Griffin, *Less Than a Treason : Hemingway in Paris* (New York : Oxford UP, 1990) 42-43.
- 5 Carl P. Eby, *Hemingway's Fetishism* (Albany : State U of New York P, 1999) 136.
- 6 Jeffery Meyers, *Hemingway : A Biography* (New York : Harper & Row, Publishers, 1985) 119-20.
- 7 Meyers 119.
- 8 Michael Reynolds, *Hemingway : The Paris Years* (New York : W. W. Norton & Company, 1989) 113.
- 9 Meyers 120.
- 10 Baker, *Hemingway : The Writer As Artist* (Princeton : Princeton UP, 1963) 141.
- 11 Baker, *Hemingway* 135.
- 12 Baker, *Hemingway* 136.
- 13 本論で取り上げなかった論文以外では、ベイカーの解釈の流れに沿ったものとしては、アラン・ホルダー (Alan Holder) 及びクリントン・S・バーンズ (Clinton S. Burhans) の論文がある。ベイカーの解釈と距離を置こうとしているものには、リチャード・ハズバニー (Richard Hasbany) の論文がある。短篇をも扱っていると思われる研究書を調べても、「雨の中の猫」を分析しているものは極めて少なく、言及程度で終わっているものが大部分である。
- 14 Sheldon Norman Grebstein, *Hemingway's Craft* (Carbondale : Southern Illinois UP, 1973) 108.
- 15 Joseph De Falco, *The Hero in Hemingway's Short Stories* (Pittsburgh : U of Pittsburgh P, 1963) 158-59.
- 16 Kenneth S. Lynn, *Hemingway* (Cambridge : Harvard UP, 1987) 252.
- 17 John V. Hagopian, "Symmetry in 'Cat in the Rain.'" *The Short Stories of Ernest Hemingway : Critical Essays*, ed. Jackson Benson (Durham : Duke UP, 1975) 231.
- 18 Oddvar Holmesland, "Structuralism and Interpretation: Ernest Hemingway's 'Cat in the Rain.'" *New Critical Approaches to the Short Stories of Ernest Hemingway*, ed. Jackson Benson (Durham : Duke UP, 1990) 64.
- 19 Eby 136.
- 20 Warren Bennett, "The Poor Kitty and the Padrone and the Tortoise-shell Cat in 'Cat in the Rain.'" *New Critical Approaches to the Short Stories of Ernest Hemingway*, ed. Jackson Benson (Durham : Duke UP, 1990) 248.
- 21 Bennett 246-47.

Works Cited

- 1 Baker, Carlos. *Hemingway : The Writer As Artist*. Princeton : Princeton UP, 1952. 3rd ed. 1963.
- 2 ---. *Ernest Hemingway : A Life Story*. New York : Charles Scribner's Sons, 1969.
- 3 ---. *Ernest Hemingway : Selected Letters 1917-1961*. New York : Macmillan Publishing Company, 1981.
- 4 Bennett, Warren. "The Poor Kitty and the Padrone and the Tortoise-shell Cat in 'Cat in the Rain.'" *New Critical Approaches to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Ed. Jackson Benson. Durham : Duke UP, 1990.
- 5 De Falco, Joseph. *The Hero in Hemingway's Short Stories*. Pittsburgh : U of Pittsburgh P, 1963.

- 6 Eby, Carl P. *Hemingway's Fetishism*. Albany : State U of New York P, 1999.
- 7 Grebstein, Sheldon Norman. *Hemingway's Craft*. Carbondale : Southern Illinois UP, 1973.
- 8 Griffin, Peter. *Less Than a Treason : Hemingway in Paris*. New York : Oxford UP, 1990.
- 9 Hagopian, John V. "Symmetry in 'Cat in the Rain'" *The Short Stories of Ernest Hemingway : Critical Essays*. Ed. Jackson Benson. Durham : Duke UP, 1975. 230-32. Rpt. in *College English*, XXIV (December 1962) . 220-22.
- 10 Hemingway, Ernest. *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*. New York : Charles Scribner's Sons, 1987.
- 11 Holmesland, Oddvar. "Structuralism and Interpretation: Ernest Hemingway's 'Cat in the Rain.'" *New Critical Approaches to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Ed. Jackson Benson. Durham : Duke UP, 1990. 58-72.
- 12 Lynn, Kenneth S. *Hemingway*. Cambridge : Harvard UP, 1987.
- 13 Meyers, Jeffrey. *Hemingway : A Biography*. New York : Harper & Row, Publishers, 1985.
- 14 Reynolds, Michael. *Hemingway : The Paris Years*. New York : W. W. Norton & Company, 1989.